静岡大と静岡文化芸術大の学生が、専攻する分野の知識や技術を生かして地域活性化を目指すため4月に浜松市で設立した学生団体「ＮｏＫｉｎ．」の活動が本格化している。6月下旬には初企画として、子供が多く生まれる「多子社会」の実現を考えるワークショップを市内で開催。「世界を変える前に浜松を変えよう」をスローガンに、地元企業へのＩＴ技術やデザイン面の支援などを通して活性化策を提案していく。

浜松活性化へ学生知恵

静岡大と静岡文化芸術大 団体が活動本格化

多子社会の実現に向けたワークショップで話し合う「ＮｏＫｉｎ．」のメンバーら＝浜松市中区

メンバーは大学で工学やデザインを専攻する34人。「頭脳を筋肉のように鍛える」（脳筋）をコンセプトに命名した。エンジニア、プランナー、デザイナー、営業の4部署を設け、学生が社会と関わる企画の立案、プログラミングの勉強会などを定期的に行っている。代表の静岡大工学部4年の土屋尚輝さん(23)は「メンバーの専門性と、社会人よりも長い勉強時間が確保できる学生の強みを生かし、地域を元気にするための提案をしていきたい」と話す。

社会問題解決 専攻生かす

日本青年会議所と共同で6月下旬に開いたワークショップには、メンバーをはじめ大学生や社会人23人が参加し、多子社会の形成をテーマに議論した。グループごとに模擬政党をつくり、「ジェンダー教育の教科化」「手当支給で学生結婚促進」などの公約を発表し、模擬選挙も行った。静岡大工学部4年の米山健太郎さん(23)は「自分たちで声を上げて行動していかないと、若者が望むような社会にならないと感じた」と話す。

秋ごろをめどに浜名湖周辺に活動拠点「イノベーションハブ」を構え、高齢化や技術革新などの課題を抱える地元農家に解決策を提供していくという。浜名湖周辺の観光スポットを紹介するアプリの開発にも取り組む。土屋さんは「主体的に地域の未来を考え、浜松の活性化に貢献したい」と意気込む。

（浜松総局・磐村光紀）

© 静岡新聞社　無断複製転載を禁じます